

大学の教育学教育における「問題」発見と論述の過程

—— 朴聖雨教授の教育実践をてがかりにして ——

浜 田 博 文（東京学芸大学）

1. はじめに

あらためて振り返ってみると、いま筆者が大学で行っている授業や、学生に対する研究指導の姿勢や手法の重要部分は、朴教授によって支えられている。こんなことを述べていると、「まだ何もわかっていないあなたのような人の浅薄な実践とむすびつけないで…」という教授の苦笑をまじえたお叱りの声が聞こえてきそう。だが、筆者が大学時代に朴教授から受けた授業や研究指導の「自己体験」、そして教授がほかの授業や学生指導に取り組んでおられる姿勢や手法を時おり垣間見てきたことなどが、いまの筆者自身のつたない教育実践のベースをかたちづくっていることは間違いない。

とはいうものの、「朴教授による教育実践について何か論ぜよ」という課題はたやすいものではない。朴教授は、韓国の学校教育界で秀逸無比の教育実践と研究の実績を持ちつつ東京教育大学へ留学された。その後、周知のように、教育経営に関する理論的研究の業績を蓄積されている。大学での朴教授による教育実践は、そのようなご自身の幅広いご経験と深遠なご研究に裏打ちされたものである。筆者のような浅学の身で、それらを十分に視野に含めた考察などできるはずがない。また、そのような朴教授から多大の影響を受けてきた筆者にとって、教授の教育実践を論ずることは、少なからず、自分自身の教育実践の背景を論ずることにもなる。

だが、朴教授の授業は、少なくとも筑波大学教育学系においては間違いなく「稀有」であった。その実践を、教育学教育のあり方を考察する材料として対象化して提示する試みは、筆者のみならず教育学教育に携わる者にとって少なくない意義をもつことだと考える。この際、教授への失礼は承知のうえで課題にのぞむしかなさそう。教育学教育に携わる後身の一人として、みずからの「教師としての職能成長」の契機という意味を含めて、恥を忍んで取り組むことにしよう。

なにぶん筆者の「直接体験」からすでに15年近い年月が経過しており、筆者自身の記憶には心もとない部分が多い。教授の授業内容にかかわるところは、現在手元にある資料をひもときつつ辿っていった筆者の記憶に基づいていることをお断りしておかねばならない。以下、過去5年間に筆者が大学で行ってきた教育実践と、そこで抱いてきた教育学教育のあり方についての関心をもおりませながら、稿を進めていくことにしたい。

2. 朴教授による教育学教育実践の概要

いま筆者の手元に、3冊の論文集がある。『教育研究』第20巻（101頁）、『学校教育論集』第18

巻(50頁)、そして『教育経営理論研究』第17巻(72頁)である。『教育研究』は教授が「学類」(第1～13巻は人間学類、第14～20巻は日本語・日本文化学類)で担当された授業での受講学生による論文集、『学校教育論集』は大学院修士課程(教育研究科および地域研究研究科)の授業、『教育経営理論研究』は博士課程(教育学研究科)の授業でのそれである。いずれの巻も「1997年3月発行」で、「最終刊」であることが教授ご自身による「序」において言明されている。

これらの論文集は、年度末に受講生が提出した小論文を受講生ら自身がとりまとめて印刷・製本作業をおこない刊行されてきた。ちなみに表紙をめくると、学類生のものにはワープロと手書きの小論文が混じっているが、装丁は一般の研究紀要類と同様の立派なものである。過去20年間にわたって、朴教授の授業を受講したことのある学生の誰もが、それぞれのテーマで小論文を作り上げ、この論文集の作成過程に関わってきたことになる。

筆者は1982年度に教授の「教職論」を初めて受講した。したがって1983年3月に刊行された『教育研究』第6巻には筆者の小論文も掲載されている。テーマは「小学校社会科の成立と変遷過程」で、載っているのは要約でほんの1ページ半の量だが、自分の文章が活字になった感激を今でも覚えている(手書き原稿を印刷して綴じた別冊子に全文が載っている)。

この年にテキストとして使ったのは、三好京三著『いい先生みつけた』(潮出版、1982年)であった。この本は、著者が「いい先生」だと考える12名の教師の教育実践のルポルタージュである。もともとは『婦人と暮らし』という雑誌に1981年4月～1982年3月の1年間連載されたもので、「研究」を意図したものではない。誰でも気軽に読めるという性格のものである。

授業では、このテキストを次のように扱った。受講生が1人1章ずつ分担して1回につき1人ずつ順に口頭発表していく。その際、発表予定者は自分の担当箇所を一読した後に必ず教授の研究室へ足を運んで具体的な指導を受ける。読んでみて自分が発見したこと、疑問を感じたこと、さらに知りたいと思ったことが何であったのかが、教授とのやり取りの中で明らかにされていく。担当者の思考過程から出てきた言葉によって「問題」が構成され、発表のテーマがおぼろげながら見えてくる。必要に応じて教授は関連文献を紹介し、発表者はそれらを手がかりにして発表準備にとりかかる。こうして発表者は個人による探究の過程へと引き込まれていく。発表前には教授がレジュメ原稿に目を通され、授業時の論議のテーマが確認される。

筆者は最初に教授のもとへかがったとき、担当個所の事例から「生徒指導」の問題をとりあげるつもりだった。ところが、自分としてもそのようなとりあげ方がいま一つしっくりこないと感じていた。詳しくは思い出せないが、そう感じながら教授からの問いに答えていろいろと思考をめぐらせ、テキストを読み返しているうちに、「社会科」という教科がもっている他の教科にない特徴や意義にしだいに注目していった。たしか、研究室へかがった何回目かに、「社会科」に注目して発表してみたい旨をお話したとき、「よくそのような『問題』に目をつけましたね。本当にあなたはすばらしい。」というようなことをおっしゃられて感激してしまった。この言葉によって「その気」にさせられてしまったことが、その後の筆者の人生を変えて(狂わせて?)しまったといえるかもしれ

れない。

こうして1回目の発表がおわると、次は小論文作成にむけての論文構成と論述の作業が各自に課される。今度は上記のテキストから離れて、各自の発表内容をベースにした小論文テーマを設定し、論述するのである。この過程でも、構想の段階、執筆の途中の段階での発表が授業の中でなされていく。受講生全員がこのような過程を通り抜けて最後に小論文が提出され、冊子にまとめられるわけである。

いま、15年ぶりにテキストを読み返してみると、筆者担当の部分はわずか14ページ、しかも会話を盛り込んだきわめて平易な文章だから、ほんの数分であれよあれよという間に読みおわってしまう。それでも色鉛筆で傍線を引いた跡があり、「問題」を見出すために一生懸命読み返したであろうことが推察される。教室の中で日常的に繰り返されているなんの変哲もない授業の光景を描写した記述から、教育現象の中の「問題」を学生自身に発見させる作業が、いかに根気のいるたいへんなことであるか。いまになって、改めて朴教授のご指導の偉大さをかみしめている。

3. 教育研究の原体験としての「問題」発見と論述

当時の筆者の小論文は、戦後教育改革における「社会科」の出発にまつわる歴史的背景、および、その後の学習指導要領改訂の道筋を軸にした学習指導論－問題解決学習、系統学習、発見学習－の展開と特徴について文献調査によって整理し、社会科の現状と課題を提示するという内容であった。もちろん、学類（他大学でいえば学部）3年次生であるから、論文としてオリジナリティがあるわけでもなく、内容も文章も稚拙である。けれども、自分自身で「問題」を発見して、それにまつわる事柄をできるかぎり探究して、まとまりのある形にむけて論述していった過程は、今でも印象深い。筆者は、自分が大学で授業を担当し始めてから、とくに演習形式の授業計画を練る際には必ずといっていいほどこの時の自分の体験を思い起こしている。

だが、その時の小論文が掲載されたこの冊子『教育研究』第6巻（1983年）を読み返すことは、卒業以来これまでほとんどなかった。今回、この原稿を書くにあたって久しぶりにそれをひもといてみたのだが、「序」につづられた以下のような教授の言葉は、筆者自身が無意識のうちに心にいだいてきたことを言い当てていると感じられた。

「…〈略〉…教育専攻の学生が大学における学習を通じて体得すべき学術的探究の『原体験』とはひと口でいえば、教育現象を支配し制御する基本的理法の感得と発見につながる諸活動を体験することである。そのような活動とは、教授学習行為を観察し或は参加すること、それらの過程や結果を分析、評価し記録することなどの活動はいうまでもないが何よりも整合性のある体系的知識への感性を磨き、積極的誘意性を高める活動に没入することがあげられよう。それには充実した研究成果に接し理解し“吟味することを怠らず”、かつ、そのような研究成果や文献からの学習成果を記述整理する、活動習性を身につけることが緊要である。本『教育研究』がそのような活動の一端として活用されればと願って止まない。」

さまざまな教育現象の中から学生自身が「問題」と感じることを見出し、その「問題」がなぜ、どのように存在しているかをそれぞれの探究過程を通じてつきとめ、論述という作業を経ることによって自らの思考内容を整理し、発見内容を体系づける。教授がお考えになった教育学教育とは、このような過程を一人ひとりの学生が「原体験」することであったのだと、筆者は理解する。

したがって、教授ご自身が授業の中で準備・提示される題材は、個々の学生が教育現象を正視することを可能にするものならどんなものでもよい。筆者が受けた授業では、その題材が、幾人かの教師を紹介したルポだったのである。

学生が、提示された教育現象の中から自分なりの「問題」を見出すことができれば、教授による必要に応じた助言によって、学生はさまざまな研究成果に直に接しながら基礎知識を学び、それらを吟味する過程を通じてみずからの思考を発展させることができる。けれども、この「必要に応じた助言」の適否が、論述過程における学生自身の知識獲得と探究行為の質を大きく左右する。学生の論述作業を促していく助言の適切さこそが、教授のご指導の真骨頂だといってもよい。

筆者は在学中に朴教授の「講義」をうかがった記憶がない。教授が系統的に整理して準備された知識内容を、1時間じゅう拝聴するという授業形態は、筆者にとって皆無であった。正確には、1997年3月4日に「最終講義」として行われた筑波大学教育学系の行事「ペスタロッツ祭」での講演が最初（で最後？）である。

朴教授はなぜ「講義」をなさらないのか？筆者はこのことを幾度か教授にお尋ねしたことがある。「講義は準備がたいへんですよね…」とか、「じつは朴先生は講義が下手なんでしょう」などというかつての受講生（筆者だけではない）の失礼な「突っ込み」にも、教授は例の調子で苦笑をまじえて「そうだねえ」としかお答えにならない。けれども、あの「最終講義」を拝聴すれば、そんなことはまったく本質的な理由でないことは明白であろう。よくよく思い出してみると、教授は教員研修の講師等を依頼されると、かなり手の込んだ資料を作成されていた。いったいこの資料をどのようにお使いになって、どんなお話をなさるのだろうか、と思いながらお手伝いさせていただいたことがある。

筆者は、「講義」が不要だとは思わない。むしろ、基礎知識を系統的に学んでいくことは、学生が自分の思考を整理したり、その位置を確かめるうえで必須である。そのためには、「講義」形式の授業が不可欠である。朴教授ご自身も、おそらくそのようなことは十分に認識しておられたであろう。教授はそのうえで、敢えて「講義」をなさらなかったのである。

今まさに目前で繰り広げられる教育現象を「対象」化して、そこから自力で「問題」を発見し、記述過程を通じて探究する。それをすべての学生に「原体験」させるということの重要性を、朴教授はほかの誰よりも実感しておられたのだと思う。

4. 教育学教育における「問題」発見の難しさとその試み

管見のかぎり、いわゆる教員養成大学・学部では、小学校教員養成課程の中に選修（専修）の1つ

として「学校教育」等を設けているところが多い。筆者の勤務する大学も同様で、「学校教育選修」の学生は入学後、「教育学」と「教育心理学」のいずれかを選んで卒業論文を作成する。それぞれが独自の必修科目を設定しているため、だいたい2年次になると、学生の「履修コース」がはっきり分かれる。

こうした教育課程の中でいくつかの授業を担当してみて、筆者は、1～2年次における、いわば「入門期」の教育学教育の難しさを痛感している。

周知のように、教員養成課程では、「選修」の別を問わず「教職教養」教育の内容として教育学教育が組み込まれている。そして、「選修」の中の1つに「教育学」関連の領域が位置づけられている。教員としての基礎的教養としても、大学における専攻分野をかたちづくる専門的教養としても、教育学教育のあり方は問われなければならない。

筆者の勤務校では、そのうち後者「学校教育」選修の1年次に「教育入門」と「心理学概論」が必修とされ、2年次以降は各専攻ごとの必修を別々に課している。教育学のばあいには、「教育調査法」「教育基本文献講読」「教育実験・観察法」「教育学演習」で、教育心理学のばあいには、「教育心理学演習」「心理統計法」「心理学実験Ⅰ」「同Ⅱ」である。2年次以降の科目は、各々の学問分野における「研究方法」に焦点づけられているといえるが、1年次のそれぞれの必修科目の違いは対照的である。

『履修の手引き』（平成9年度版）には、「教育入門」の授業内容が、「現代日本の教育上の諸問題について演習を行う」と説明されている。対して「心理学概論」のそれは、「心理学の研究分野全般について解説する」となっている。

後者においては、心理学の基礎的な知識を系統立てて提示し、解説していくであろうことが、およそ予想される。対して、前者においては、いったいどんな「諸問題」についてどのように「演習」するのか、漠然としすぎて見当がつかない。「教育上の諸問題」は、けっして所与ではない。何を「問題」として認識するかは、人それぞれである。そして、その認識の内容と認識のしかたは、個人の生活経験によって大きく左右される。もっともやっかいなのは、大学に入学するまでの生活経験をもつ者であれば、とりたてて新しい知識を必要としないままに、誰でも自らの経験によりかかって「教育上の諸問題」を語るができるということである。

したがって、自分が受けてきた教育、あるいは教育を受けてきた自分自身の生活経験そのものを相対化して「対象」化する課業が、教育学教育のどこかで必要になってくる。自分の経験や、それに基づく既成観念を超えたところで、教育現象が生起し存在していることを「発見」という課業を、入門期の教育学教育のプログラムの早いうちに用意する必要があるのではないかと、筆者は考える。

それにはさまざまな手法があろう。たとえば筆者のばあい、その試みの1つとして、教員養成課程の必修として開講されている教職教養の授業（いわゆる教育原理）で次のようなことを行っている。最初の時間の冒頭で、「教育」という言葉から連想する単語を3つ以内で記述させる。それを集計し

て結果を次回に提示する。結果の詳細は年度やクラスによって微妙に異なるが、すべてにわたって共通していることが1つある。それは、大部分の単語が「学校」に直結していることである。ほとんどの学生が、「教育」＝「学校」という既成観念をもっていることがここに示される。そこで、「でも、本当に『教育』＝『学校』なのか？」と問いかける。その後の講義を通じて、個々の学生が、人間と教育とのかかわり、人間と学校とのかかわり、教育と学校との関係、さらには学校と社会との関係等について、自分自身の経験を相対化しながら捉え返していくよう意図した試みである。

また、前記「教育入門」などでおこなった試みの1つに、ロール・プレイがある。

教員志望の学生の多くは、「よい学校体験」をもっている。教室という空間の中で教師と子どもが温かい人間的ふれあいをもつ光景として「学校」や「教職」をイメージしている者が多い。そんな学生にとって、学校が抱えている「問題」状況や教師をとりまくさまざまな葛藤などを、切迫感をもって感じ取することは、実際にはとても難しい。また逆に、学校や教師にさんざん苦しめられて大学に入学したという経験をもつ学生も少なくない。そのような学生は、「学校は善」という既成観念からは自由である半面、教育や学校について真剣に考えること自体を避けようとするばあいが見うけられる。

そこで、これまでの各自の経験とは違った立場で「学校を疑似体験する」機会をもとうとしたのが、ロール・プレイ（1泊2日の合宿）である。「子ども」「教師」「父親」「母親」の4つの役を決めて、最初だけ特定の「状況」を設定して「場面」を展開していく。どの役も演じない者は、いずれかの役を自分で演じているつもりで周囲から場面展開を見守る。具体的には、「いじめ」「不登校」のケースをとりあげた。生活経験としては「子ども」としてしかもっていない学生にとって、「教師」や「父親」「母親」の役を演ずることは、それ自体容易ではない。ところが、進めていくうちに、全員が思わず固唾をのんで目前の教育現象の一場面に集中する。きわめて限定された仮想現実の中ではあるが、これを契機として、これまで見えなかった学校や教育の一面が視野に入ってくるということを、終了後の感想から確かめることができた。

5. おわりに

筆者は、教育学教育に対する定見を持ち得ぬまま、「問題」発見を促すための試行錯誤をいまでも続けている。筆者にとってこの試行錯誤は、冒険的な要素を多分にもっていて、それ自体が面白味をもっている。

しかし、こと「論述」を学生に課すということになると、それは苦難にみちた作業だ。学生にとってそれがイヤな課題であるのはいうまでもないが、一人ひとりの学生が教育研究の面白味を「原体験」できるべく、それぞれの論述の過程で適切な指導や助言をほどこすのは、とてもむずかしい。論述課題を与えて提出期限を決めただけで、あとは提出されるのを待つだけ。提出された小論文は、内容の大部分がどこかの本の抜き書きであったり、分量の帳尻を合わせるために途中から間延びしていたり、というケースが少なくない。

学生個々の問題関心を整序するために問答をかきねたり、適切な参考文献を紹介したり、学生自身の思考過程を整理したりすることが、やはり必要なのだと思う。しかし、現実にはそこまでの指導はあまりなされていないのではないだろうか。

教授の教育実践には、その過程が明確に意識的に位置づけられていた。先に紹介した『教育研究』第20巻の「序」で教授がお書きになったつぎの言葉は、その証左であろう。

「 学術の中心とされる大学で学習、研究する諸君にとって自分の探究の成果を論文として記述し発表することは、最も基本的で必須の作業である。この紀要発刊の趣旨は、学生諸君が小論文形式のまとまった論考を作成することによって、独創的な問題の発見および解決の能力として整合性ある論証能力を高め、論文文章の記述能力を伸長させることで、充実した卒業論文作成の素地をたかめるということであった。

また、1年間の大学の講義によって学生がどれほど成長し、何を得たかを確認することは、学生自身にとってまた講義を担当した教官にとっても自己省察の契機であるとともに、学問探究を媒介に人生の特定の時期を分かちあった学縁の意義をたしかめる機会にもなり得ると思ったことにもある。

高等学校を卒業して間もない学生諸君にとって『論文を書く』という作業はまさに苦難に満ちた課業であった。しかし、受講生諸君はこの課業を挫折することなく、それぞれ独特の視点にもとづいた論文を完成し、またその苦闘の過程が自己実現の喜びを伴う意義ある軌跡であったことを表白している。喜ばしい限りである。」

教授が残された地道ながらも誠実かつ着実な教育実績をこうしてふりかえてみると、あらためてその足跡の重厚さに敬服する。長年、朴教授から教えを受けてきて、現在大学の教壇に立っている者の一人として、これを自らの道標として心に刻み、地道に前進していく覚悟である。